

コーシャ・フェレンツ監督・脚本

## 「いま一人の人」(A másik ember)

1987年に制作されたこの作品は、1956年動乱を題材にしているために、1989年の体制転換まで一般上映が許可されなかった。ハンガリーでは共和国への移行が宣言された1989年10月に、2日間にわたってテレビ放映され、大きな反響を呼んだ。日本では1991年に「東欧映画祭」のなかで初上映された。

原題の A másik ember は哲学で言う「他者」を意味する。あるいは、実存哲学における「即自」にたいする「対自」、つまり自分と向き合う他者を意味する。もっとも、映画を通して哲学的なテーマが追及されているわけではなく、主人公が「敵」や自分を裏切る「友」などの相手を理解しようとする姿勢が、全編を通して貫かれている。

### 第1部ストーリー

ストーリーはボイタル・アンタル親子2代の生き様を、2部構成でまとめたもの。第1部はナチスドイツと組んだハンガリー軍が対ソ戦線から敗走する1944年、小隊のボイタル・アンタルと、ボイタルによって危うく命を救われた同僚のトルダ・ヨーゼフが主役。2人ともエルディイ出身の学校教師。敗走の途中にソ連のパーティザンの襲撃を受けるが、生き延びる。しかし、彼らに待っていたのは、敵前逃亡者にたいする軍事裁判。処刑されるところが、ハンガリー人ナチス将校レーティに見込まれ、2人は処刑を免れる。

処刑者が突き落とされ藻掻き苦しむ深い穴に向かって無慈悲に発砲するレーティを、アンタルはとっさに突き落とし逃亡を図る。ところが、友人の小心者ヨーゼフは逃げることを拒否し、その場に居残る。

舞台は変わってプスタの農家。妻ユーリア、一人息子のアンティ、妻の父マルトンが家を守っている。すでに憲兵隊が家宅捜索を始めているが、誇り高いマルトンは憲兵に逆らい、両手両足を縛られ、馬に引き摺られて連れ去られる。

軍から逃げたアンタルは夜の闇に紛れて家にたどり着き、犬小屋に身を隠す。翌日、ナチス将校レーティに恩を売ったヨーゼフは、彼の手先となってアンタルを誘い出そうとする。アンタルの帰宅を否定する妻に、「レーティは生きている。早く逃げろ」と伝言し、銃創を外した銃を置いて去る。しかし、銃を受け取ったことは、アンタルの存在を伝えたのと同じこと。

アンタルは家族との別れを惜しむ間もなく、森に向かって出発するが、そこにはレーティの部隊が待ち伏せしている。アンタル逮捕を引き換えに自由の身を保証されたヨーゼフは、アンタルに逃げろと叫ぶが、逆にナチス隊長に銃殺される。アンタルは拘束され、連行される。

アンタルが去った家に、憲兵隊の拷問を受けたマルトンが馬車で戻って来る。ひどく威厳

を傷つけられたマルトンは馬小屋で休む。そこに、村の結婚式帰りの楽隊が心を癒やす歌を奏でる。「鳥かごから小鳥が逃げた。春になったら戻って来るさ。春に帰ってこなかったら、夏には戻るだろうよ。夏に来なかったら、秋には戻るさ。それでも戻って来なかったら、もう帰って来ない」。このうら悲しい唄を、ハンガリーの民謡歌手シェベスチャン・マルタが歌う。

主人公のボイタール・アンタルは武器を持たずに森へ向かった。なぜなら、武器を手にする者は、それを使うと使わざるとにかかわらず、潜在的な殺人者になると同時に、武器の犠牲者にもなるというのが、彼の信念だったからである。しかし、武器を持たない者も、武器の犠牲者になるという現実を否定することができない。アンタルは再び家に戻ることはなかった。命の恩人をナチスに売り、力に頼って自由を得ようとしたヨーゼフもまた、命を落とした。逃亡者に安全なはずの森は、罠としても利用される。理想主義者にも現実主義者にも、人間世界は容赦ない。それでも人々は理想主義と現実主義の狭間の中で生きていかなければならない。理想も現実も、一人の人間の中で同等な位置を占める。アンタルもヨーゼフも、同じ人間の二つの側面に他ならないのだ。

## 第2部ストーリー

ボイタール・アンタルが連れ去られて12年。時まさに1956年10月。ハンガリー動乱の真っ只中、学生の追悼・決起集会の場面から第2部が始まる。学生リーダーのフランツ・イシュトヴァン(ピシュタ)は政府との代表交渉委員に、アンタルの息子アンティを指名する。

アンティは代表に相応しくないと前置きした後に、父親の信念にしたがい武器を持つ闘争に疑念を挟む。また、学生たちがラーコシ体制と社会主義体制を混同していることにも異論を唱え、「資本による権力でも、国家による権力でもなく、公正な権力が樹立されること、社会主義は真の民主主義に裏打ちされて初めて樹立される」と訴えるが、参加学生からブーイングを受けて会場を去る。

ブダペスト市内は次第に騒乱の状況が極まり、銃弾が飛び交う状態になる。医師・看護婦として活動しているアンティの恋人の医学生ジュジャは、アンティを探しに拘置所襲撃現場にたどり着くが、アンティを見つけたその瞬間に銃撃を受け、病院で息絶える。

アンティはジュジャが銃撃を受けた現場周辺を訪れ、誰が何の目的で引き金を引いたのか知ろうとする。協会の屋根裏部屋にたどり着いた途端、身を隠していた公安警察官に銃で威嚇され、衣服を交換させられる。アンティは公安警察の制服をもって、警察官の自宅まで道のりを同行することになった。ところが、途中、公安警察の車から銃撃を受け、アンティの私服をまっていた警察官が狙撃される。アンティは彼を担いで近くの住宅に飛び込むが、警察官は息を絶える。彼の遺言通り、彼の母親に連絡しようと再び出発するが、公安警察の制服は住民の憎しみの対象になっていて、アンティは銃を持った住民たちに追いかけられ、大学の寮に逃げ帰る。

場面は転換し、アンティの実家。夫を失い、父親と一緒に生活するユーリアは、騒乱のニ

ユースを聞き、首都にいる一人息子の安否を気遣う。祖父マルトンが孫を説得にブダペストに出かけることになり、早く家に戻ってくるようにと認めたユーリアの手紙を携える。出発にあたり、村の集会所にはマルトンや、もう一人の祖父（アンタルの父）、村の有力者が集まり、食料や献血を貯めたワイン樽を載せた馬車（これはコーシャ監督の実経験から描かれた）の出発を見送る。

ブダペストは市街戦に突入しており、いたるところに夥しい痛い傷が横たわっている。死刑の絞首刑を受けた公安警察官が引きずり回され、小さな子供の亡骸を抱えながら泣き崩れる母親の姿が映し出される。ようやく大学の寮に到着したマルトンは、食料と手紙を渡し、一緒に田舎へ戻ろうと諭すが、アンティは「今は帰れない」と答える。そのうち、片が付いた田舎に戻るといふ母への伝言を祖父に託す。

アンティは学生リーダーのピシュタたちと、ジュジャが銃撃された周辺へ出かける。そこへたどり着いた途端にどこからともなく銃撃を受け、1人2人と銃弾に倒れ、ピシュタもまた命を落とす。武器を持たないアンティは相手を見極めようと、銃弾が発射された方向へと林間を歩み始めるが、その瞬間に狙撃される。

ここでも、武器を持つ者も持たない者も、同様に命を落としてしまう。武器を取らないことが理想主義と知りつつ、父の教えを守ろうとするアンティ。現実主義に埋没し、銃撃戦のなかで死んでいく友人たち。住民の指弾をかいぐって帰宅を急いだ公安警察官。人は外見や服装で善悪を判断するが、若い警察官にも同じ生活があり、家族がある。アンティと同じように、家には愛おしい息子を待つ母親がいる。

緑豊かな自然に恵まれた地球上で、同じ人間同士がどうして殺戮を繰り返して行かなければならないのか。勝者は勝ち誇り、敗者は打ちのめされる。相互に立場を変えながら、この野蛮な闘いが続けられている。僕と君は同じ人間ではないか。僕は君、君は僕だ。アンティの素朴な信念は、人類にとって永遠の課題だ。

祖父マルトンはアンティの亡骸を抱えて村に戻るが、まず老ボイタールに相談する。事の真実をアンティの母親に知らせるべきか、それともしばらくの間、秘密にしておこうか、と。老ボイタールは真実を知らせ、厳しい現実と向かい合いながら生きる以外にないではないかと言うが、マルトンはあまりに厳しい現実が少し和らぐまで、暫くは嘘を通したいという。祖父二人が墓地に向かい、アンティを葬る。

ユーリアはマルトンに尋ねる。息子は何時戻ってくると言ったのか、どうしてすぐに戻れないのか、と。「そうね、一段落するまで無理よね、何から先に口に頬張ったのかしら。」手玩味の返事は書いてくれたのかしら」。マルトンは生返事を繰り返しながら、馬が疲れているから傍で休んでやると、寝具を馬小屋に運ぶ。ユーリアはそれ見て、事の成り行きを悟り、力を失っていく。

映画はここで終わる。夫に次いで、一人息子も失うという重い結末に、日本人会の観客の皆さんは言葉少なに試写会を後にした。

本稿は日本人会会報「ドナウ通信」に掲載した映画評（1996年7月）を、2018年12月のコーシャ監督の死去に伴い、加筆修正したものです。